

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00251

研究課題名（和文）文化環境との関わりからみた即興演奏技能の発達 イラン音楽を事例として

研究課題名（英文）The Development of Improvisation Skills in Relation to Cultural Environment: A Case Study of Iranian Music

研究代表者

谷 正人（TANI, Masato）

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：20449622

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：2019年8月から2020年1月まで、および2023年8月から9月までイランに滞在し、フィールドワークを行い研究計画書で言及されているタグのうち「言語リズム」「古典詩の世界観」「音組織」「楽器固有の身体性」「口頭性」について、個人的インタビュー及びレッスンを重ねることで以下の知見に結びついた。1．古典詩の韻律と音楽のリズムとの関連性 2．音楽創作における規範と逸脱について具体的事例およびその背景にある美学の抽出 3．楽器固有の奏法や語彙が即興演奏の中で如何に意味を持つものなのかについての知見 4．イラン音楽の口頭性に基づいた世界観の中では、旋法間の移動や横断には大きな自由度があること

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの常に作曲との対比の中で「自然にまかせた衝動」「計画性の欠如」「予測不可能性」などといったイメージでとらえられる傾向が強かった即興演奏という行為について、あらゆる即興行為は100パーセント自由なわけではなく、何らかのかたちで文化習慣などに深く規定されていることを明らかにしたこと。また更に即興演奏は、個人の特性のみで行われるだけではなく、即興演奏を行う集団からの影響も適宜受けつつ実際には存在しており、その意味において即興演奏は、様々な環境的・文化的要因からの影響も考慮しつつ考察を進めてゆくべき対象であることを確認できたこと。およびそれらの成果を英語と日本語の2冊の書籍として出版したこと。

研究成果の概要（英文）：I stayed in Iran from August 2019 to January 2020 and August to September 2023 to conduct fieldwork and conduct personal interviews and lessons on the tags mentioned in the research proposal: “language rhythm,” “view of classical poetry,” “tonal structure,” “physicality specific to musical instruments,” and “orality,” which led to the following findings. The following findings emerged from personal interviews and lessons: 1. the relationship between the prosody of classical poetry and the rhythm of music; 2. concrete examples of norms and deviations in musical creation and the aesthetics behind them; 3. the significance of instrument-specific techniques and vocabulary in improvisation; 4. the significance of the orality in Iranian music; and 5. The fact that there is a great deal of freedom in moving between modes in the orally based view of Iranian music.

研究分野：民族音楽学

キーワード：イラン伝統音楽 即興演奏

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

民族音楽学の中で即興演奏は常に考察の対象となってきた。これまでの(西洋)音楽研究の枠組みのなかで即興演奏は、常に作曲との対比の中で「自然にまかせた衝動」「計画性の欠如」「構成のあいまいさ」(Nettl 1998)「予測不可能性」(谷 2007:70)などといったイメージでとらえられる傾向が強かったが、実は文化によって両者を線引きする境界線は曖昧であるし(Nettl 1974)あらゆる即興行為は 100 パーセント自由なわけではなく、何らかのかたちで演奏習慣などに深く規定されている。更に即興演奏は、個人の特性のみで行われるだけではなく、即興演奏を行う集団からの影響も適宜受けつつ実際には進行している事例も存在する。すなわち即興演奏は、様々な環境的・文化的要因からの影響も考慮しつつ考察を進めてゆくべき対象なのである。

2. 研究の目的

本研究課題「文化環境との関わりからみた即興演奏技能の発達 イラン音楽を事例として」は、イラン伝統音楽を対象として、演奏家コミュニティという集団的環境のなかで、個々人は即興演奏の技能をどのように発達させているのか 「集団が持つ多層的な社会的・文化的秩序」の網の目の中で、一個人がどのように他者との相互行為によって、即興演奏というコミュニケーション形態を発達させているのかを探るものである。

3. 研究の方法

2019 年 8 月から 2020 年 1 月まで、および 2023 年 8 月から 9 月までイランに滞在し、フィールドワークを行った。具体的には谷自身がより深く参与観察するために、研究計画書で言及されているタグのうち「言語リズム」「古典詩の世界観」「音組織」「楽器固有の身体性」「口頭性」について、個人的インタビュー及びレッスンを重ねることで理解を深めることを主たる目標とした。

1. 即興演奏内で如何に言語リズムおよび古典詩の世界観が規範として機能したり或いは逸脱しているのかという点においては、マハムード・キャリミー伝承のラディーフ(伝統的旋律型集)内で歌われる古典詩の韻律分析作業と音楽のリズムとの関連性について現地の専門家に師事しながら作業を行った。

2. 即興演奏内での音組織(ダストガー)の規範と逸脱については、主に、ミルザーアブドッラー伝承のラディーフを対象として、その構造を分析するとともに、その構造に基づいた即興演奏及び作曲を行い、現地のインフォーマントに添削してもらうことで、音楽創作における規範と逸脱について具体的な助言およびその背景にある美学を抽出することができた。

3. 即興演奏内での楽器固有の身体性にかかる規範と逸脱については、実際に様々な楽器の教授方法を直接調査し、楽器固有の奏法や語彙が即興演奏の中で如何に意味を持つものなのか、声楽特有の技法がいかに器楽奏法の中に浸透しているのか、タール奏法がいかにサントゥール奏法に影響を与えているのか、などについて多くの知見を得た。

4. 即興演奏内での「口頭性」については、本研究では「楽譜に縛られない、旋法間の自由な移動や横断」と解釈したうえで、旋法間の移動の多くのサンプルを収集するとともに、その理論的整合性についても現地の音楽家たちインタビューを行い裏付けを行った。結果、楽譜としてラディーフに示されている規範のみならず、イラン音楽の口頭性に基づいた世界観の中では、旋法間の移動や横断には大きな自由度があることが明らかとなった。

4. 研究成果

上記の研究成果は、主として下記の日本語単著書籍、英語単著書籍としてアウトプットを行ったが、ここでは上記項目 3 と 4 に関連したものを述べる。

例えば単著 Traditional Iranian Music - Orality, Physicality and Improvisation Trans Pacific Press Co., Ltd. 2024 年 2 月 (ISBN: 9781920850357) 第 12 章 第 2 節は、上記項目 3 と 4 に対応するもので、それまでに様々な角度から論じてきたダストガーと呼ばれる旋法体系が、熟練した演奏家のもとではどのように活かされているのかを、転調(モードギャルディ)を含む高度な演奏を実際のデータとして詳細に報告・分析したものである。具体的には、同書第 10 章で指摘したテトラコードに関する知見をもとに、イラン音楽の転調がどのように行われているのかを実際の即興演奏をもとに報告し、転調を促しやすい要素や契機について考察するとともに、イラン音楽にとってそもそも転調それ自体が名称から予期されるほ

ど特別な事態ではない可能性について言及を行っている。譜例 12.4 と 12.5 は転調前の音楽を採譜したもの。、それが譜例 12.6 の箇所へ転調してゆくありようを詳細に分析した。また、その音楽が譜例 12.7 や 12.8 へと回帰してゆく様子をも分析を行った。

Chapter 12



Score 12.4 *Darāmad* in *afshārī* mode (followed by *Qarā'ī*) (transcribed by Masato Tani)



Score 12.5 *'Erāq* in *afshārī* mode (transcribed by Masato Tani)



Score 12.6 *Darāmad* in *bayāt-e tork* mode (transcribed by Masato Tani)



Score 12.7 *'Erāq* and returning to original component pitch of *darāmad* (from E *koron* to E^b) in *afshārī* mode (transcribed by Masato Tani)



Score 12.8 *Rohāb* (line 1) and return to *darāmad* in *afshārī* mode (line 2) (transcribed by Masato Tani)

また同章第 3 節は、かつては教えられるものではなかった即興演奏や音楽作りが今やどのように教授されるようになっているのか、その具体的手順について詳細に報告したものであり、第 2 節とともに先行研究には類似の成果がみられないものとなった。具体的には、

セタール・タール奏者のバーバック・ローハティ氏によるシュール旋法の音楽創りのレッスンへのフィールドワークをもとに、その場で無作為に選ばれたハーフェズによる古典詩をベースとしながらどのように即興演奏が組み立てられてゆくかについて報告・考察を行った。それにより「即興に関する多くの『無意識の』処理は、ラディーフの『地の部分（旋律のキャラクターが明確に表れる部分以外の箇所）』に地味に表れているもので、それらはラディーフを多く弾きこなし暗記するプロセスのなかで音楽家内に培われている」ことを具体的に例証するものとなっている。その具体的な分析の一つは以下の図の通りである。

Table 12.1 Metrical analysis of Hāfez's poetry

long	short	long	long	short	short	long	long	short	short	long	long	short	short	long
dū	sh	dī	dam	ke	ma	lā	yek	da	r-e	mei	khā	ne	za	dan(d)
fā	'e	lā	ton	fa	'a	lā	ton	fa	'a	lā	ton	fa	'a	lon
1		2		3			1		3		1		3	
ge (Short)	l-e	ā	dam	be	se	resh	tan	do	be	pei	mā	ne	za	dan(d)
fa	'a	lā	ton	fa	'a	lā	ton	fa	'a	lā	ton	fa	'a	lon
	3		1		3		1		3		1		3	

Chapter 12

As early as the third count, the music settles briefly on the *shāhed* and *ist*.

The ending of the first *mesrā'* (hemistich, half-line of verse) has an undecided, unresolved feel. Temporarily stops at A koron. Alternatively, prolonged B \flat could be interpreted as the "unresolved note" (*ta'liq* – to be explained later).

With a slight sense of irresolution, the second *mesrā'* begins.

First appearance of the note one whole tone below the *ist* (rather than above, as previously), which arouses desire for the *ist* at a new level (i.e., it acts like a "leading tone").

The music resolves briefly here, but through prolongation and changing of the pitch again...

...the music is brought to a conclusion at the *beit* (couplet, equivalent to two *mesrā'*).

To emphasize the resolution, the last two feet are sometimes repeated.

上記英語書籍以外の研究成果は下記の通りである。

単著

『イラン伝統音楽の即興演奏 声・楽器・身体・旋法体系をめぐる相互作用』
スタイルノート 2021 年 1 月

口頭発表

「イラン音楽のモードギャルディ〜転調を巡る美学」
第 39 回イラン研究会（於：国立民族学博物館） 2021 年 3 月 28 日

「サントウールの撥の持ち方をめぐる一考察 形から力の考察へ」
関西イラン研究会第 59 回研究会 2021 年 6 月 19 日

「カームカール・アンサンブルの音楽にみるハイブリッド性 多数派集団との関係性および身体性の視座から」日本文化人類学会 第 55 回研究大会 2021 年 5 月 30 日

谷正人著『イラン伝統音楽の即興演奏：声・楽器・身体・旋法体系をめぐる相互作用』（2021 年、スタイルノート）読書会における解説
第 4 回中東音文化研究会（科研費基盤研究（B）『中東少数派の音文化に関する研究：共有と非共有に着目して』（研究代表者：飯野りさ）） 2022 年 1 月 22 日

「イラン音楽における即興」
日本音楽即興学会第 15 回大会基調講演 会場：八王子市学園都市センター 2024 年 1 月 20 日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 谷正人
2. 発表標題 カームカール・アンサンブルの音楽にみるハイブリッド性 多数派集団との関係性および身体性の視座から
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷正人
2. 発表標題 サントゥールの撥の持ち方をめぐる一考察 形から力の考察へ
3. 学会等名 関西イラン研究会第59回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷正人
2. 発表標題 谷正人著『イラン伝統音楽の即興演奏：声・楽器・身体・旋法体系をめぐる相互作用』（2021年、スタイルノート）読書会における解説
3. 学会等名 中東音文化研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷正人
2. 発表標題 イラン音楽のモードギャルディ-転調を巡る美学
3. 学会等名 第39回イラン研究会
4. 発表年 2021年

1．発表者名 谷正人
2．発表標題 イラン音楽における即興
3．学会等名 日本音楽即興学会第15回大会基調講演（招待講演）
4．発表年 2024年

〔図書〕 計3件

1．著者名 谷正人（分担執筆「地域ごとの音楽（イラン）」）	4．発行年 2023年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 748
3．書名 イスラーム文化事典	

1．著者名 谷正人	4．発行年 2021年
2．出版社 スタイルノート	5．総ページ数 132
3．書名 イラン伝統音楽の即興演奏 声・楽器・身体・旋法体系をめぐる相互作用	

1．著者名 Masato TANI	4．発行年 2024年
2．出版社 Trans Pacific Press Co., Ltd.	5．総ページ数 244
3．書名 Traditional Iranian Music - Orality, Physicality and Improvisation	

〔産業財産権〕

〔その他〕

美学の事典

<https://www.maruzen-publishing.co.jp/item/b303987.html>

中東・オリエント文化事典

<https://www.maruzen-publishing.co.jp/item/b303888.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------